

研究活動報告

2021年度秋季展 「^{ロイヤリティ}王朝文化へのまなざし—戦前期女子教育における—」

《関連イベント》オンラインフォーラム「戦前期女子高等教育における教育標本」

概要

展覧会「王朝文化へのまなざし—戦前期女子教育における—」では、当ミュージアムが所蔵する登録有形民俗文化財「武庫川女子大学近代衣生活資料」の戦前・戦中・戦後期の教育標本資料から、京都府立女子専門学校旧蔵の有職人形と裁縫雛形、郷土人形に焦点を当てて、戦前期の女子の高等教育における教材がどのような役割を果たしたかを示します。併せて、女子の高等教育がどのようなもので、当時どのような意味を持っていたのかについて考えることを最終目標としますが、今回は、当館所蔵の関連資料も加えて、教材としての標本資料がどのようなものであったかを中心に紹介します。

オンラインフォーラムでは、京都府立女子専門学校旧蔵資料と当時の女子高等教育との関連や教育標本の製作を担った島津製作所の活動や役割、戦前の学校教育における郷土教育の教材としての資料の内容と役割等に焦点を当て、当時の教育標本の意義について明らかにしていきたいと思えます。

このオンラインフォーラムを通して、戦前期の女子高等教育の様相が少しでも明らかになり、現在に連なる足跡と、さらに未来の女子大学へと展開する在り方に光が当たることを期待します。

日 時：2021年11月30日（火）13：30～15：40

会 場：オンライン配信

参加費：無料

主 催：武庫川女子大学附属総合ミュージアム

オンラインフォーラムスケジュール

13：30 開会・趣旨説明

横川 公子（武庫川女子大学 特任教授／武庫川女子大学附属総合ミュージアム 館長）

13：35 講演①

「資料を後世に伝える—京都府立女子専門学校と京都府立大学女子短期大学部—」

森 理恵（日本女子大学 教授）

14：05 講演②

「島津製作所標本部の展開と実態」

川勝 美早子（島津製作所 創業記念資料館 学芸員）

14：35 講演③

「昭和初期郷土教育実践における資料の位置づけ

—京都市学校歴史博物館所蔵資料を例に考える—」

林 潤平（京都市学校歴史博物館 学芸員）

15:10 パネルディスカッション

パネリスト：株本 訓久（武庫川女子大学附属総合ミュージアム 研究員／情報メディア学科 准教授）

※急遽、欠席となった。

伊永 陽子（武庫川女子大学附属総合ミュージアム 助授）

15:40 閉会

オンラインフォーラム登壇者 プロフィール（敬称略）

森 理恵（もり りえ）

日本女子大学 教授

徳川美術館、神戸ファッション美術館準備室、金蘭短期大学、京都府立大学を経て現職。専門は日本服飾文化史。近世から近現代における日本の衣生活について、ナショナリズム、コロニアリズムやジェンダーの視点から研究している。著書に『桃山・江戸のファッションリーダー描かれた流行の変遷』（塙書房）、「キモノ表象の民族主義と帝国主義」（『グローバル関係学5「見えない関係性」をみせる』第1章、岩波書店）など。

川勝美早子（かわかつ みさこ）

島津製作所 創業記念資料館 学芸員 課長

龍谷大学・同志社女子大学ほか 非常勤講師

2008年頃から京都の小・中学校の統合や廃校が進む中で教材として使用されてきた理化学器械・標本資料の調査を行った。現在は全国からの依頼に対応し、保存活動などを継続している。また、標本資料の収集活動によって島津製作所創業記念資料館において初めて標本展示を行い、島津製作所標本部の歴史を広く紹介した。2011年、開館以来初めての展示リニューアルを担当。

林 潤平（はやし じゅんぺい）

京都市学校歴史博物館 学芸員

京都先端科学大学・近畿大学ほか非常勤講師（教育史ほか）。専門は近代日本教育史。とくに自然に関する教育について長年研究を継続しているが、そのプログラムの一環として昭和初期の地理教育、郷土教育運動についても研究・考察を行う。また京都市学校歴史学芸員として京都の教育史を研究するなかで、京都市における郷土教育の展開についても調査を進めている

横川

それでは時間になりましたので、本日のオンラインフォーラム『戦前期女子高等教育における教育標本』を始めさせていただきます。このオンラインフォーラムは、開催中の秋季展の関連イベントでございます。本日の司会を務めさせていただきます、附属総合ミュージアム館長の横川と申します。よろしくお願いいたします。

武庫川女子大学附属総合ミュージアムは、1994年に創設されました旧資料館の趣旨を受け継ぎ、2020年4月に開館されました。1939（昭和14年）の本学開学以来、収集してきました美術工芸品と、教育研究に資するために明治・大正・昭和の時代の生活用具などの民具が収集されてきましたが、当館はそれらを活用して公開展示をする施設です。今までにも教育資料を用いて展覧会を企画し公開してきましたが、今回の展覧会「^{ロイヤリティ}王朝文化へのまなざし—戦前期女子教育における—」では、幸いにして保存され継承されることによって紛失を免れた教育標本資料に焦点を当てることで、これらを実際に活用していた戦前期の女子高等教育の在り方を発掘し、そのことによって見えてくる女子高等教育の在り方を歴史的に位置づけようとするものです。今回の展覧会では、寄贈資料のほか、当館所蔵の関連資料も加えて、教材としての標本資料がどのようなものであったかを中心に紹介しています。

展覧会で取り上げた教育標本は、他機関にも散見されます。教育標本とそれらを活用した教育内容との具体的な関わりや、教育標本の製作の実際について、さらに範囲を拡大して明確にしていく必要があります。現在はその途上であり、今回の展示は現段階で把握したものを公開したものであり、関連情報収集のきっかけのひとつになることを目指しております。

本日のオンラインフォーラムもそうした取り組みの一つであり、現段階での収集や取り組みの成果を拠り所として実施しています。講演の先生方には、それぞれの専門のお立場から、資料を拠り所とした関わりや展開、課題をご示唆いただけたらと考えています。ということで、現状での成果とその関連教育における実態や情報について、さらに発掘する機会になれば何よりと期待しています。

現在、当館で展示している裁縫雛形には戦後のものも含まれておりますが、戦前期の標本資料が、戦後の新制大学にどのように継承されたのか、されなかったのか、あるいは、明治まで視野を遡りますと、学制成立以来の教育の歴史の経緯として見えてくるものがあるのではないかと考えています。

オンラインフォーラムでは、講演者の皆様から、それぞれご講演いただきます。全体を通して当時の教育標本の意義について発見あるいは再発見に繋がっていくことを期待しています。ご講演に入る前におおまかなスケジュールを説明させていただきます。各講演時間は質疑応答含め30分としています。なお各講演者のプロフィールは、詳細についてはあらかじめお送りしておりますメールに添付した資料でお確かめいただきたいと思います。なお、ご講演に関するご質問はチャットからお願いいたします。オンラインフォーラムは録画して後日配信する予定でございますのでご活用いただければと思います。それでは、まずはじめに、日本女子大学家政学部教授の森理恵先生から「資料を後世に伝える—京都府立女子専門学校と京都府立大学女子短期大学部—」というタイトルで講演をお願いいたします。よろしくお願いいたします。

講演①

「資料を後世に伝える—京都府立女子専門学校と京都府立大学女子短期大学部—」

森 理恵

(日本女子大学 教授)

森

皆様こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました森理恵と申します。どうぞよろしくお願いたします。それでは画面の共有をさせていただきます。このような意義深いフォーラムにお招きいただきましてありがとうございます。私は、現在は日本女子大学というところに勤務しておりますが、その前に京都府立大学に勤務しておりました関係で、こちらの資料に関わってきたことで、今回お招きいただいたものと存じます。本日のお話はあらかじめお断りしておきますと、あまり学術的な内容というよりは資料がどのような経緯を経て今この武庫川女子大学（附属）総合ミュージアムの方で展示していただいているのか、というようなことを一種の語り部のような形で少し私の知っていることをお伝えしたいということで、お話しさせていただきたいと思います。先週ミュージアムの方で展示を拝見したんですけれども、この図録にも掲載していただいておりますが、このような素晴らしいミュージアムで立派な展示ケースの中にこれらの資料が美しく展示されているのを見て、本当にちょっと感無量でございました。では、始めさせていただきます。

現在武庫川女子大学附属総合ミュージアムでご所蔵いただいております京都府立女子専門学校の関連の資料といえますのは、京都府立女子専門学校→京都府立大学女子短期大学部→京都府立大学→武庫川女子大学、という順番で伝わってきたものでございます。だいたい三種類に資料が分けられていまして、あとで詳しくお話があると思いますが有職人形、それから裁縫教育の関連資料、そして郷土資料ということになります。図録の中に横川先生が詳しく書いてくださっていますので、詳細はそちらをご覧くださいだと思います。どのような授業で使われたのかなというのを、あくまで推測ですけれども、有職人形の場合は国語、例えば平安文学を講じたりするような際に国語ですとか歴史の授業で使われたと考えております。裁縫教育関連資料はもちろん裁縫、あるいは今で言う被服管理に相当する資料も含まれておりますので、そうしたものですと家事の授業であったのかということを想像いたします。郷土資料につきましては授業で使われたというよりは課外活動のような形で教員の指導のもとに全学の有志が収集したのではないかと、というふうに、目録は、今は失われてしまったかもしれないのですが、目録が伝わっていましたのでそのようなことを想像しております。これらの三種の資料がどのように使われて伝わって来たのかということを示すために、京都府立女子専門学校と京都府立大学女子短期大学部について簡単にご紹介いたします。その後、『研究室と市松人形』という文章をご紹介します。そして最後に、女子短期大学部閉学後の流れについて、私の知っていることをお伝えするという形で進めて参りたいと思います。本日の主な資料は、京都府立大学百年誌編纂委員会『京都府立大学百年誌』（1995年）と、京都府立大学女子短期大学部記念誌編集委員会『京都府立大学女子短期大学部記念誌 桂・下鴨の四十七年』（1998年）でございます。

まず、京都府立女子専門学校（図1）ですが、1927年の創立で京都府民の強い要望を受けて創立されたというふうに言われております。が、最初は敷地を獲得できずに京都府立第一高等女学校、現在の京都府立鴨沂高校内に間借りの形で開校したそうです。文学科、理学科家政科、理学科理科

とありまして、図1の括弧内に当時行われた授業・科目を書いておりますが、四角で囲んだところが有職人形が使われたのではないかなと想像する授業、それから丸で囲んだところが裁縫教育関連資料が使われたのではないかなという授業でございます。そして1933年に念願の校地を得まして、阪急京都線の桂駅のすぐそば、東側に今でも阪急京都線に乗っていると見えますが、現在は京都府立桂高校になっている所でございますが、そちらに校地を得て、移動いたしました。そのころには、文学科と家政科裁縫科、家政科家事科という構成になりました。文学科は裁縫という授業は正規の授業ではなく課外授業の形で行われておりました。そして、その後文部省の方針で全国どこの学校もそうだったと思うんですけども、アジア太平洋戦争の末期と言いますか後半と言いましょか、1943年以降に目まぐるしく学科の再編が行われるわけなんですけど、この京都府立女子専門学校も例外ではなく、1943年に保健科・理学科ができたりとか、1944年に裁縫科が被服科に変わったり、理学科が物理科学科に変わったり、戦後ですが1947年に保健科が生活科に変わったり、ということが起こっております。そして1951年に新制大学の発足に伴い閉校ということでございます。その後は、ここに簡単に書いてありますが、国語科の一部が京都府立大学女子短期大学部の文科国語専攻に受け継がれ、被服科は京都府立大学女子短期大学部の家政科被服専攻に受け継がれたということになります。

京都府立女子専門学校

1927年創立 府立第一高女内

- 文学科 (修身、教育、**国語**、漢文、**歴史**、英語、哲学概説、法制及経済、音楽、体操)
- 理学科家政科 (修身、教育、**家事**、**裁縫**、理科、英語、法制及経済、音楽、体操)
- 理学科理科 (家政科科目+数学)

1933年～桂校地

- 文学科 (修身、教育、哲学・美学、**国語**、漢文、**歴史**、英語、法制及経済、自然科学、**家事**、音楽、体操、**裁縫(外)**)
- 家政科裁縫科 (修身、教育、**裁縫**、**家事**、理科、**国語**、英語、法制及経済、数学、図画、音楽、体操)
- 家政科家事科 (修身、教育、**家事**、理科、**裁縫**、**国語**、英語、法制及経済、数学、体操)

1943年～1944年～1947年～1951年 (閉校)

- 国語科 → 京都府立大学女子短期大学部文科 (国語専攻)
- 裁縫科→被服科 → 京都府立大学女子短期大学部家政科 (被服専攻)
- 保健科 →生活科
- 理学科→物理化学科

参考 京都府立大学百年誌編纂委員会、京都府立大学百年誌、1995年

図1 京都府立大学女子専門学校 沿革

次の京都府立大学短期大学部(図2)ですが、こちらはどのような経緯を辿ったかと言いますと、1949年に京都府立西京大学が発足いたします。文家政学部・農学部の2学部で、4年制の共学でございます。2年遅れて1951年に西京大学女子短期大学部が発足いたしまして、こちらに文科・家政科。ここのところがちょっとややこしいんですが、まず京都府の方で女子専門学校と農林専門学校を合わせた形で府立の大学を作ろう、と。最初は京都府立大学ではなく京都府立西京大学という名称だったんですが、それを作りましたが、その後女子の短期大学部を2年後に作ったということで、閉学の時の記念誌をご覧くださいますと、この女子短期大学部こそが桂女専、桂にあったので桂女専と呼ばれたりするんですが、を継承した学校であると。で、女子短期大学部という名称なんですけど、4年制の大学とはやや独立したような形で行われていたというふうにお聞きしております。

す。そして、1955年に文科・家政科であったものを国語科・被服科に改称するんですが、これはより実態に合わせた名称に変更したというふうに聞いております。国語科では、中井和子先生という源氏物語研究で有名な先生がいらっしゃいますが、物語文学の研究に特色があったというふうに言われております。

京都府立大学女子短期大学部

- 1949年 京都府立西京大学発足（文家政学部・農学部）四年制、共学
- 1951年 西京大学女子短期大学部発足（文科・家政科）
- 1955年 国語科・被服科に改称

国語科 ※中井和子氏を中心に源氏物語等物語文学の研究に特色

被服科（衣料学、被服デザイン、被服工作、被服衛生、被服整理、家政学、住居学、育児、家庭看護、家事理科）

- 1959年 京都府立西京大学が京都府立大学と改称
- 1962年 桂から下鴨に移転

被服科（衣料学、衣料学実験、染色学、意匠学、被服構成、被服製作実習、被服整理、被服史、食品学、栄養学、調理実習、家庭看護、住居学、家庭機械及び家庭工作、家庭管理、日本生活史、工芸史、園芸学、茶道史）

※2階に「資料室」あり 歴史・意匠学重視

- 1973年 生活経済科発足
- 1990年 被服科を生活文化科に改称
- 1992年 英語科発足
- 1998年 閉学

参考 京都府立大学女子短期大学部記念誌 桂・下鴨の四十七年、1998年

図2 京都府立大学女子短期大学部 沿革

1959年に京都府立西京大学が京都府立大学と改称いたしました。そして1962年に、桂から下鴨に移転。申し遅れましたが、ここまでのところは桂と農林専門学校があった下鴨とに校地が分れていたんですが、1962年に京都府立大学として一ヶ所に、現在の京都府立大学がある下鴨に一ヶ所に校地を集めたということになります。その頃の、被服科の科目を図2の括弧内に書いております。この頃の女子短期大学部の被服科と申しますのが、2階に資料室があり、歴史や意匠学、科目構成をご覧いただきますと工芸史、園芸学、茶道史、という科目もあり、歴史や意匠学が重視された学科であったと記念誌に書いてあります。この2階に資料室があり、そこに郷土資料などが展示されたというのは、私がお聞きしたことなんですけれども、今回展示していただいているような資料もこの頃はそこに置かれて展示もされていたのではないかなと想像しております。そして、その後、女子短期大学部は1998年に閉学ということになりました。

京都府立大学女子短期大学部の歴史を知る資料として、宮田文庫というのが今も京都府立大学の特色あるコレクションとして知られております。また、染色作家の志村光広先生など、有名な先生が在籍していらっしゃいました。今日ご紹介したいのが、奥村萬亀子先生とおっしゃいまして、私の前任者の先生にあたるんですが、残念なことに昨年ご逝去されました。本来でしたらここで、私ではなく奥村先生にお話いただくのが一番相応しかったわけなんですけれども、大変残念なことに昨年ご逝去されましたので、その代わりは務められないんですが、私がお話しさせていただいております。奥村萬亀子先生の代表的なご著書は『京に「服飾」を読む』（染織と生活社、1998年）でございますが、今日ご紹介したいのは、奥村先生はご専門は日本服飾史でいらっしゃいますが、その奥村先生が短期大学部の閉学の時の記念誌の中に、文章をお書きになっていらっしゃいまして、少し読ませていただきたいと思っております。短い文章で名文だと思っておりますので、読ませていただきます。

「研究室と市松人形」(『京に「服飾」を読む』より引用)

私が短大に就職したのは、短大が下鴨学舎への移転を目前にひかえた一九六二年一月一日であった。その時、桂学舎の古色蒼然とした和裁研究室にはなぜか市松人形が飾ってあった。新米の私は先生の後にひかえて実習授業の手伝い、お茶のお相手、空いた時間は来る日も来る日も引越しの準備。高校教師から短大助手に転職したものの、これは一体何なのかと思う日々だった。あの頃の引越しといえば今とは大違い。とげのささりそうな荒い板で作った石炭箱に荷物をつめ、荒縄をかけるのである。いくつもいくつも石炭箱の荷物を作る。顔は埃まみれ、手は荒れてガサガサ。トラックで運搬するのは今は亡き農場技師の麻田さん。私も荷台に乗ったり、運転席の隣りに乗ったりして下鴨へ行ったものである。つまりは引越し人夫として就職したようなものであった。それから三十六年も経ってしまった。あの時の市松人形が今も私の研究室に立っている。

はじめ、大学の研究室というものと市松人形とが、どうしても不似合な不思議なものに思えて仕方なかった。だいたい経ったある時、赴任して来られた先輩の先生が、この学校に市松人形のあることを懐かしんでお話になった——旧制の女子高等師範学校や女子専門学校の裁縫科では和洋裁の実習が主要科目であり、最上級生になると「人形のきもの」が課題になっていた。この実習のためにみんなお人形(はだかの市松人形)を買ってもらったものだ——と。そういえば昭和二十四年版奈良女子高等師範学校裁縫研究会編『裁縫精義』の第七巻の特殊物篇に、「人形のきもの」がとりあげられているし、和裁研究室の資料の中には、この市松人形の外にもはだかのお人形が何体かあった。実習の手本として縫われたきものが、この市松人形に着せ付けられているのである。かつて女性がお嫁入りの時に自分で縫った着物を着せた市松人形を持って行くという習慣があったのである。そのため、お人形のきものが縫えるということも女性の高い教養を示すものであったのだ。市松人形と研究室の関係がようやくわかり、それ以来、このお人形がこの研究室に不似合なものだと思わなくなり、はげちよろけたきものを気の毒に思いながら一緒に過してきた。

社会が変化し、生活が変わり、女性の生き方が変わり、女性の学ぶ姿勢も変わった。そしてこの科の内容もそれに対応して変化した。しかしどんなに生活が変わっても、人間の暮しから消えることのない「着る」ということ。この服飾の問題を私たちは考え続けてきた。今、過去のゼミ論集を見返しながら、自分の力不足を思い、学生の皆さんに申し訳なかったと思うことしきりである。私が六十三歳で定年退職する日、奇しくも短大が四十七年の歴史を閉じることになった。学校を去った後、振り返ってみてもそこに私を三十六年間はぐくみ育ててくれた短大はもうないのだ。何だか背後が空白になってしまうような気がする。市松人形は研究室にそっと置いて行くことにする。

以上でございます。

奥村先生が去られた後、私が京都府立大学に赴任したわけなんですけれども、市松人形は研究室にずっと置いておりました。そして、武庫川女子大学の方に寄贈という形の時に市松人形も一緒に収めていただいたことと存じます。今、奥村先生の回想にありましたように桂から下鴨への移転が大変なお引越しであったということなんですけれども、お聞きしておりますのは、この時に洋裁の資料は、担当者のご判断により全て処分されたということだそうです。ですが、和裁の資料に関しましては、タンスと一緒に武庫川の方に行っていると思うんですが、タンスごとお引越しして、下鴨の方にあり、それを短期大学部の方で守り伝えられたということなんです。が、問題は女子短期大学部の閉学後の状況なんです。私が赴任した時には、階段の踊り場のようなところに置かれて埃をかぶっており、あまりきちんと保管されているという状況ではありませんでした。頼み込んで部屋の中に移動していただいたりだとか、色々と苦労しましたが、京都府立大学の方には、

こちらのようにミュージアムですとか、そういった施設がないものですから、保管ですとかあるいは研究ですとか、そういうことができないということで、武庫川女子大学さんの方に寄贈させていただいた、という経緯でございます。

私の方からお話し差し上げることは以上でございます。ご参考までに、私が京都府立大学におりました時に、学生さんが卒業研究としてこちらの資料を取り上げて一生懸命研究したものを紹介いたします。長弘真由美・森理恵「京都府立女子専門学校における裁縫教育の意義」（『京都府立大学学術報告人間環境学・農学』55号、2003年）。宇田容子・森理恵「京都府立女子専門学校における在校生および教員収集の郷土資料に関する研究」（『京都府立大学学術報告人間環境学・農学』57号、2005年）。こちらは京都府立大学の学術リポジトリで誰でもインターネットで見ることができますので、ご関心のある方はぜひご覧いただければと思います。なお、今日のお話に関連して私が以前に書きました論文はこちらでございます。森理恵「女性中心的領域と男性中心的領域とのせめぎあいー女子教育と裁縫教育・被服教育ー」（『女性史学』20号、2010年）。私からは以上です。どうもありがとうございました。

横川

ありがとうございました。ご質問のある方にはチャットでお願いしていますが、届いていないようです。森先生から、府立女専の教育資料を引き継ぎさせていただいたのは、実は当時、武庫川女子大学に赴任しておりました私で、受け手の方になったわけです。先ほど森先生がおっしゃっていましたが、タンス類を含めまして武庫川女子大学のミュージアム収蔵庫には収めさせていただいています。今回はその中から、全部を出したわけではございませんけれども、主要な展示品になっています。改めてお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

森

こちらこそ、受け取っていただいて本当に感謝しております。しかもこんな立派な展覧会まで開いていただいて。別に私の物ではないんですけども、本当に嬉しく思っております。私の方でももしお時間があればですけども強調したかったことが、元はと言えば京都府立女子専門学校の物なんですけれども、京都府立大学になってからの女子短期大学部の存在も非常に重要で、先生も書いておられますが、裁縫資料の中には女子短期大学部時代のものも混ざっていると思いますので、これから女子短期大学部のところも視野に入れつつ、もし取り上げていただければいいのでしたら、お願いしたいと思った次第でございます。

横川

実は、過去に裁縫資料を取り上げた展示もございまして、その中でさっきおっしゃっていたような被服管理に関する実験結果の資料とか、裁縫の部分縫いなども含めまして、一度展示に出してまして、その図録もございまして。

森

ありがとうございます。

横川

武庫川女子大学は戦災に遭っておりまして、戦時中のものがほとんど残っていないんですね。そ

ういうこともありまして、京都府女専や短期大学部の資料は、おそらくその時期の空白を埋めることができるような資料にもなると思っています。今後大学ミュージアムの重要な側面といたしまして、本学における教育研究の成果として出していきたいと思っています。また色々ご協力をよろしくお願いします。

森

洋裁の関係の資料があれば本当にもっとよかったと思うんですけども、洋裁のものは全部処分されてしまって。奈良女子大学の方には、今日関係の方がいらっしゃるかわからないんですけど、洋裁のものもそろっていらっしゃって、展覧会もされたこともあったかと思いますので、またいろいろな学校の資料も合わせて考えることができれば、より実りあるのかなと想像したりしております。

横川

そうですね。ありがとうございました。それでは時間になりますので、パネルディスカッションの時にさらにお聞きしたいと思います。

講演②

「島津製作所標本部の展開と実態」

川勝 美早子

(島津製作所 創業記念資料館 学芸員 課長)

横川

次は島津製作所創業記念資料館課長で学芸員の川勝美早子先生です。「島津製作所標本部の展開と実態」というタイトルです。どうぞよろしく願いいたします。

川勝

ご紹介いただきました川勝です。どうぞよろしく願いいたします。今回の展覧会に出陳されている中古装束人形が島津の標本部製であることから、今回このように報告をさせていただくことになりました。実は、当社の標本部について公の場でお話をするのは今日が初めてのことでございます。そのため、標本部の沿革、地理学標本の製作や女子教育の教材など全体的に触れ、みなさまからご意見やご教示を賜りたいと存じます。

まず、報告に入る前に当館の収蔵品の中で、一番古い剥製標本である丹頂鶴をご紹介します(図1)。この剥製は、明治末期に室内調度品として制作されたもので、寄贈時の情報によると、捕獲の場所は京城(現ソウル)付近で、おそらく生きてまま船便で日本へ運ばれ、島津の標本部に持ち込まれたようです。長らく福知山の旅館で飾られ、旅館の廃業後も同地で保管されていましたが、2019年の建物の取り壊しを機に寄贈いただきました。その際、埃で羽などが全体に黒っぽくなっていましたが、京都の坂本剥製製作所に修復を依頼し今の姿に蘇りました。ちなみに、坂本剥製製作所は明治13年頃、初代坂本福治が東京大学動物学教授の助言のもと坂本式剥製術を確立し、三代目三六が昭和元年に東京から京都へ移住して開設しました。その理由は島津の標本部を充実させるためであったと伝えられています。



図1 丹頂鶴

さて、島津製作所は、明治8年、島津源蔵(初代源蔵)が教育用理化学器械を製造したことに始まります。初代源蔵の家業は仏具の鋳物業であり、三具足(燭台・香炉・花立)を作っていました。明治14年に開催された第二回内国勸業博覧会には理化学器械を出品しており、その審査表に初代源蔵が金属の部分を作製したと記されていることから、仏具製造で培った金属加工の技術を用いて理化学器械製造業へ展開したとわかります。このことは、理化学器械の金属の形状を見ても技術の連続性が想像できます(図2)。

一方、標本製作は仏具製造とは全く異なる分野です。では、島津はどのようにして標本製作に必要な技術や知識を身に付け事業化していったのでしょうか。まずは、標本部を開設する明治28年以前の文献資料から、標本に関する記載を紹介します。これは島津が



図2 電気密度試験器

明治15年に発刊した目録です(図3-1、2)。約110点の理化学器械が掲載されており、その大半は物理学器械ですがその中で「光学ニ属スル器械」に「眼球雛形」があり、また後書きに「汽車雛形 上等」「鉄橋」などが見られます。「汽車雛形」は「八十五円」と目録の中で一番、高価な製品です。

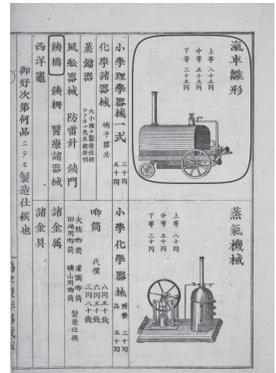
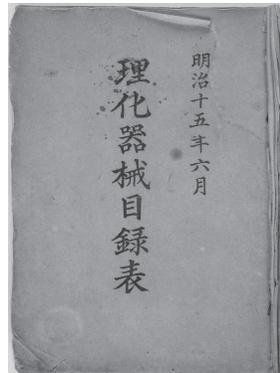


図3-1 『理化器械目録表』表紙

図3-2 『理化器械目録表』頁

つぎに、初代源蔵が明治19年から21年にかけて発刊していた月刊誌である『理化学的工芸雑誌』には、駒場農学校獣医科(現：東京大学農学部)の卒業生である生駒藤太郎が「動物組織論」を27回にわたって連載しており、その他には「動物標本を保存するの注意」(12号)といった標本製作に関する内容も掲載されています(図4)。

また、明治27年の目録の謹告には、「理化ノ諸器械ヲ始メトシ体操器具博物標本其他一切小学校設備準則ニ必須ノ諸物品ハ弊所ニ於テ製作セサルモノ無ク」と記されており、小学校に必須の物品類について弊社で作らないものはないと強調しています。このことから、当時、教育用理化学器械製造メーカーにおいて理化教育に必要なものが一式揃っていることが最も重要であったと考えます。

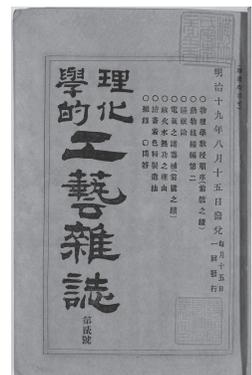


図4 『理化学的工芸雑誌』

こうした流れは、明治19年の「小学校令」で従来の博物・物理・化学・生理という教科を一括して「理科」と改称されたことによるものと思われる。ただ、標本事業への志はあったものの、当時販売していたのは金石の標本や動物の剥製ぐらいでした。

さて、この頃すでに標本製作を生業としていた先行業者として東京の山越工作所があります。創業者の初代山越長七は、明治10年に東京帝国大学医科大学に入り、解剖学士の今田東の指導を受け、人体解剖及模型の製作技術を修得しています。また、二代目長七も東京帝国大学解剖学教室で学んだ後、京都帝国大学に入学し、明治42年にはヨーロッパにわたり、オーストリアのウィーン大学において蠟製模型の製作を学んでいます。こうした経歴からも、標本製作には学術的な知識が必要であったことがわかります。

さて、京都では、明治22年に第三高等中学校、明治27年に第三高等学校が設置されました。島津が本格的に人体や動植物の生態に関する模型標本の製作を始めるのが明治24年であり、標本部を開設したのが明治28年です。また、明治30年には京都帝国大学理工科大学が設立され、大正8年からは動物学や植物学の講座が設けられました。ちなみに、東京帝国大学に動物学科が設けられたのは明治10年です。このことから、島津は教授らを通じて博物学関連の最新の知識を獲得することができ、それが新事業の開設につながったと考えられます。明治36年の第五回内国勸業博覧会には、標本21点を出品し、環器系等の模型、普通植物学標本が三等賞を受賞していることから、この頃になると標本製作が軌道に乗ってきたことがわかります。

さらに、技術面においては、明治40年に山越工作所の技師であった高橋清吉が標本部に入社し、人体生理模型の製作を始めています。明治42年には、アラスカユーコン太平洋博覧会に人体模型を出品して大賞・金牌を受けています。これは島津における、海外での初めての受賞でした。

当時、島津は標本部の鉱物学顧問として比企忠、動物学顧問として会田龍雄、植物学顧問として平瀬作五郎に依頼していました。比企は京都帝国大学理工科大学採鉱冶金学科の助教授であり、会田は京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学）の教授でした。また、会田は島津と同じ学区にある銅駝どうだ小学校出身でした。平瀬は、花園大学中学校の教諭であり、1806年には、イチヨウの精子を世界で初めてプレパラートで確認しています。こうした専門家を顧問に迎えることにより明治44年頃には標本部も拡大してきました。

これは明治44年の島津の業務系統図ですが（図5）、標本部には、事務局、作業部、販売部、商品部の4つの部が設けられています。作業部には「模型工場」「顕微鏡室」「剥製工場」がありました。商品部には「鑄物係」「植物係」「動物係」「地歴係」があり、この頃には「地歴」という言葉が確認できます。右側の写真は、当時の標本部の工場の外観です（図6）。これが応接室の写真ですが（図7）、人体模型や鳥の剥製などが所狭しと飾られていてこの部屋に通されたらちょっと怖い感じがします。下の写真は標本部の事務室です（図8）。左側は鳥類の剥製の陳列室、動物や液浸標本の陳列室もあります。つぎの写真は工場での製作風景（図9）ですね。上が模型工場、下が彩色部とあります。職工や事務員も写っていますが、明治39年当時、全体の職工の212人のうち、50人が標本の職工でした。その他に下請けの工場が9ヶ所あって、下職と呼ばれている人が約120人いました。

では、系統図にある「地歴」についてですが、明治36年の目録である「小学校用理化学器械、薬品及其他諸器具目録」の「謹告」から当時の地理歴史学用の標本に対する当時の状況がわかります。「地理歴史学用標本ノ未ダ等閑視セラレツアル」とあり、地理学・歴史学の標本がまだなおざりにされていた時代でした。この目録には「殖産標本之部」に「殖産標本ノ地理、歴史、農業、商業等ノ諸学科ニ必要ナル」とあり、「今般其中最必要ナル陶器、漆器、織物、紙、茶類」の諸標本を販売することにした、と書かれています。

弊社の資料で「中古装束」についての記載が見られるのは、「総務記録」です。明治43年11月1日に清国から公使が来た際に紹介した標本の中に「中古時代歴史人形」が確認できます。当時、大礼装人形および古代遺物模型を担当したのは岩井武俊という人物でした。同年の山口・広島県の実業視察会の際も岩井が「古瓦」について説明しています。島津はこれまで

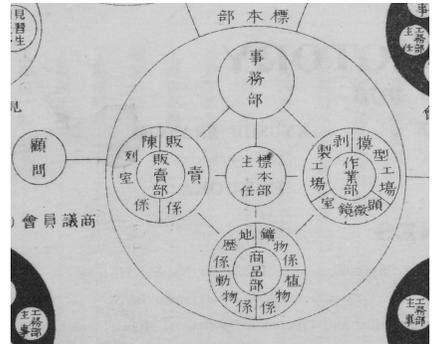
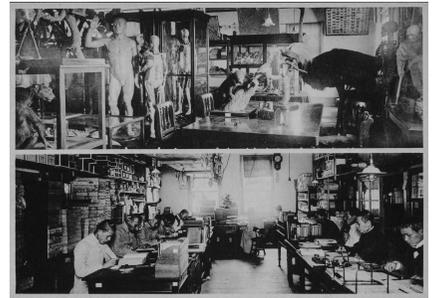


図5 「業務系統図」(1911年)



図6 標本部 (外観)



(上) 図7 標本部 (応接室)
(下) 図8 標本部 (事務室)



図9 標本部 (工場)

理学士や工学士を社員として採用してきましたが、こうした大学レベルで、人文学や歴史学、地理学を修めたうえ、標本部に入社したのは岩井が初めてであったと思われます。岩井の経歴に触れておくと、岩井は明治38年に早稲田大学の歴史地理学科を校外生として卒業しています。その後、26歳で島津に入社しますが、数年で退職しており、その後は大阪毎日新聞社で御大典の記事などを担当し昭和2年には京都支局長になっています。また、京都民芸協会を設立し柳宗悦や河井寛次郎などとも交流が深かったようです。大正3年に島津が発刊した「地理及歴史学用標本目録」には、「人種及び風俗」「経済地理」「歴史・天文地理」など、以前の目録に比べて充実した内容になっていることから、おそらく岩井が中心になって編集したのではないかと考えられます。「中古装束」については、企画展の図録に詳しく書かれていますのでここでは割愛します。

最後にまとめですが、島津は教育用理化学器械の製造においては技術や工程に先業である仏具製造との共通性が見て取れますが、標本製作はそれとは異なり全く別の分野でした。しかし、理化学器械と同様に文部省の法令や制度に準じ教育界の要請に応えるために、新事業として標本製作を立ち上げます。その際、知識面においては高等教育機関の教授らによる指導、技術面においては、専門の技師を他の会社から社員として迎えるような技術移転が見られます。

また、今日の標本製作においても一番重要なのは収集であり、島津は、当時から各府県庁に依頼して、信用できる専門家を紹介してもらい、特産物の収集や、絶えず各地に採集人を派遣していました。「中古装束人形」などは、京都であったからこそ、正確な標本を提供することができたものもあります。

最後にご紹介するのは、昭和12年に発行した「家事科目録」です(図10)。内容をみると、「衣服」には人絹標本や織物標本といった産業標本が掲載されています。「植物」には野菜の標本、鳥の剥製が見られます。「栄養学」では、栄養学を学ぶ食料献立模型や盛り付け方について書かれているページもあります。驚くのが、食物の天秤とか計量に関する器械が多くなぜか顕微鏡も掲載されています。「住居」では木材標本、「育児」では病気の症例模型や人体模型などもあります。最後の頁には「アクメシシ」も載っています。興味深いのは、理化学器械や標本として販売していたものを、表紙や目録名を家事科に変えているだけという点です。「謹告」にも家事科については、今後、意見を聞きながら内容を検討していかねばならないということが書かれています。また、この目録にはマネキンも載っています(図11)。マネキンは大正14年の標本部の中で製作を開始しました。当時島津は、美術工芸の協力者として柳宗悦にも依頼しており、岩井の人脈がマネキン製作にも繋がっていたことがわかります。本日はご清聴ありがとうございました。



図10 『家事科目録』



図11 マネキン

横川

ありがとうございました。大変興味深い内容でございました。特にその当時の教育の方向性を反映したような標本資料が、標本部には次々と出てくるということで、教育標本と教育の関係が的確に示唆されていることがわかりました。

「昭和初期郷土教育実践における資料の位置づけ

—京都市学校歴史博物館所蔵資料を例に考える—

林 潤平

(京都市学校歴史博物館 学芸員)

よろしくお願いたします。京都市学校歴史博物館の林と申します。本日はお招きいただきありがとうございます。このようなフォーラムに私がお声がけいただきましたのは、第一に今回展示されている資料が京都府立女子専門学校（以下「府女専」と表記）と言うことで、京都市にある学校であり、そうした京都市の学校にあった資料を専門的に扱っている博物館が、京都市学校歴史博物館であるところに理由があるかなと考えました。加えて、私がこれまでの個人的な研究関係で地理教育等を研究していくプロセスにおきまして、郷土教育等につきましても検討の材料に加えてきた経緯がある関係で、京都の郷土教育、まさに府女専の教育標本たちの背景に存在しておりました、そういった郷土教育の流れからですね、これらの資料の位置づけを考えてみるお役目をいただいたとも考えました。そこで、今回このようなタイトルで発表させていただく次第です。つきましては、今日の私の発表と致しまして、こんな内容のお話をしたいと考えております（図1）。

まず、発表の内容として2点、最初に取り上げておきたいのは、郷土教育運動です。この運動における資料、当然ながら教育標本も内に含んでいるのですが、その位置づけにつきましても考えてみたい。いわば教育の歴史の中で資料や標本がどのように位置づけられたのかという、今回のフォーラムのメインテーマの一つだと思っております。このことについて検討してみたいと考えております。

現在展示されております府女専旧蔵の有職人形・郷土人形の歴史的価値を考える際には、この郷土教育運動とのつながり、つながりがあることは先行研究で論じられている通りでして、その郷土教育運動の中で今回注目する人形や標本、つまり資料がどう位置づけられていたのか。この問題、先行研究の中ではあまり論じられていないというのが、私が今まで様々な文献等を見させていただいたところの印象になります。なので、この問題についてはちょっと一度踏み込んで考えてみたいということで、少し京都からも視野を外しながら、というよりもっと広い視点からですね、この郷土教育運動で資料がどう位置付けられていたのかを検討してみたい。

そしてもう一点、この府女専の背景にあった京都における郷土教育運動のあり方ですね、これがどのように展開されたのか。これに検討を加えた上で、この標本・人形について考えることが、やはり非常に大切なことなのかなと感じています。そして、京都の郷土教育運動についても、ほとんど明らかにされていないのが現状でございます。図1には記載しておりませんが、京都の郷土教育に関する先行研究は、基本的に戦後の郷土教育の動きについて現在明らかにされ始めているかなという段階でありまして、それ以外の部分はまだ明らかにされていないことも多いと考えていま

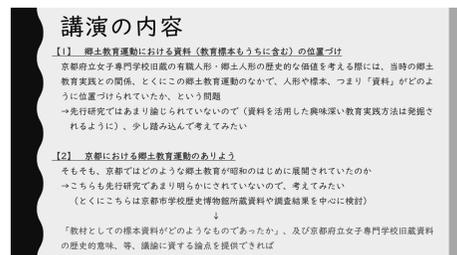


図 1

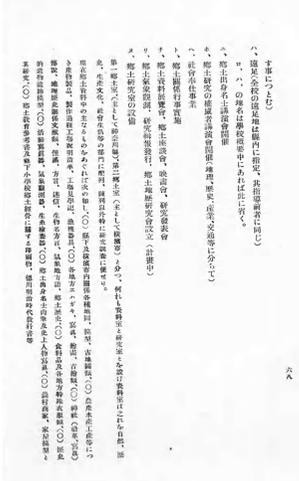


図2 神奈川県女子師範学校『神奈川県女子師範学校創立二十五周年記念誌』同校、1932年、68頁、国立国会図書館デジタルコレクションより。

す¹。そこで学校歴史博物館所蔵の関係資料であるとか、それらの資料を活用して行った調査結果を検討してみても、ひとまずその写真のようなものを描いてみて、今回まさに展示されている資料群が、教育学・教育史の観点からどのように考えられるのかという視点で、以後のパネルディスカッションや今後の議論に資する論点を提供してみたいと意識しています。

それでは早速、「郷土教育運動における資料の位置づけ」に関する部分からお話をさせていただきたいと思います。最初に前提としてですね、「郷土教育運動」というものを聞いたことがない方もいらっしゃるかもしれませんが、その点を簡単に確認しておきたいと思います²。この郷土教育運動が昭和はじめに起こった事実は、ある種日本の教育史の基本的な事項でありまして、それは次のようなプロセスで展開していきました。1930（昭和5）年度に師範学校補助、そのうちの郷土施設設備費の配分という措置が取られまして、この経済的な裏付けに加えて1931（昭和6）年の師範学校規定改正、つまり「地方研究」の追加によって運動は制度的な確立を迎えます。研究内容の設定と、それを実施できる裏付けができたことによって、以後各地の師範学校及び小学校などを中心に推進されていった、さらにいうと教育

の地方化及び実際化を目指した運動が、郷土教育運動になります。また、森先生の先行研究でフォローされておりましたが、1935（昭和10）年あたりからこの教育運動は、「日本精神」と呼ばれる日中戦争、太平洋戦争に向かっていく流れに接続されていく運動でもありまして、この運動がそうしたものとしてあったことは一応確認しておきたい。そして、今日注目している資料の面から注目すべきこととしまして、郷土施設設備費というような形で予算がついた、さらに翌年にはその用途として郷土研究資料の収集が示されたことから、この運動では非常に積極的に郷土教育に関する資料が収集されていく結果が生まれていきます。

以上を確認した上で今回注目したいのは、この2点のうちとくに後半の部分、資料がどのような存在として考えられていたのかという点です。この点でまず注目させていただきたいのは、神奈川県女子師範学校の一例です（図2）。この資料の「郷土研究室の設備」という箇所を見ていただくと、この展覧会の図録、さらには先行研究で紹介されている府女専の旧蔵資料群と、ほぼ性格を同じにするような資料が郷土研究室に集められているということが、あくまで一例ですがわかり、まず注目しておきたいです。つまり府女専の実践は、集積されている資料の内容からも、郷土教育

¹ 本フォーラムが開催された後の2022（令和4）年2月28日、井岡康時氏による「京都府における郷土教育の展開とその背景」という研究ノートが、同志社大学人文科学研究所の『社会科学』誌に発表された。京都府における明治から昭和戦前期の郷土教育に関する基本事項の整理を目的にした成果で、本発表でも言及した事項、さらには本研究で触れえなかった詳細な事項にも言及がなされているので、参照されたい。

² 以下、本稿で触れる郷土教育運動、及び全国レベルにおける戦前期の郷土教育の流れに関する事項の詳細については、主として、伊藤純郎『郷土教育運動の研究』（思文閣出版、2008年）、外池智『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究『総合郷土研究』編纂の師範学校を事例として』（NSK出版、2004年）を参照されたい。なお先述の井岡の研究ノートでも、郡誌編纂など、地方行政の流れと郷土教育の関係について、詳細を知ることができる（井岡康時「京都府における郷土教育の展開とその背景」『社会科学』第51巻第4号、2022年2月、12-18頁）。

第六項	パンフレット其他	(一)	第六項	磐島山唐菜	(四)
第七項	人口、聚落之部	(二)	第七項	愛宕山唐菜	(五)
第八項	産業之部	(三)	第八項	大江山唐菜	(六)
第九項	産業一般	(四)	第九項	日本海岸丹後後唐菜	(七)
第十項	地圃、圖表、模型	(五)	第十項	日本海岸丹後後唐菜	(八)
第十一項	京都府及附近	(六)	第十項	日本海岸丹後後唐菜	(九)
第十二項	城南海地方	(七)	第十項	日本海岸丹後後唐菜	(十)
第十三項	北桑地方	(八)	第十項	日本海岸丹後後唐菜	(十一)
第十四項	西丹波地方	(九)	第十項	日本海岸丹後後唐菜	(十二)
第十五項	東部丹波地方	(十)	第十項	日本海岸丹後後唐菜	(十三)
第十六項	奥丹波地方	(十一)	第十項	日本海岸丹後後唐菜	(十四)
第十七項	交通・信之部	(十二)	第十項	日本海岸丹後後唐菜	(十五)
第十八項	社會活動之部	(十三)	第十項	日本海岸丹後後唐菜	(十六)
第十九項	宗教	(十四)	第十項	日本海岸丹後後唐菜	(十七)
第二十項	學校其他教育	(十五)	第十項	日本海岸丹後後唐菜	(十八)
第二十一項	地圖	(十六)	第十項	日本海岸丹後後唐菜	(十九)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(二十)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(二十一)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(二十二)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(二十三)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(二十四)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(二十五)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(二十六)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(二十七)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(二十八)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(二十九)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(三十)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(三十一)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(三十二)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(三十三)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(三十四)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(三十五)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(三十六)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(三十七)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(三十八)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(三十九)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(四十)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(四十一)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(四十二)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(四十三)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(四十四)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(四十五)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(四十六)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(四十七)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(四十八)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(四十九)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(五十)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(五十一)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(五十二)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(五十三)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(五十四)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(五十五)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(五十六)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(五十七)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(五十八)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(五十九)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(六十)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(六十一)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(六十二)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(六十三)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(六十四)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(六十五)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(六十六)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(六十七)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(六十八)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(六十九)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(七十)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(七十一)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(七十二)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(七十三)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(七十四)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(七十五)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(七十六)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(七十七)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(七十八)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(七十九)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(八十)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(八十一)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(八十二)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(八十三)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(八十四)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(八十五)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(八十六)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(八十七)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(八十八)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(八十九)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(九十)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(九十一)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(九十二)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(九十三)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(九十四)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(九十五)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(九十六)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(九十七)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(九十八)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(九十九)
			第十項	日本海岸丹後後唐菜	(一百)

図3 京都府女子師範学校郷土研究室『郷土教育の概要』同室、1933年、目次、国立国会図書館デジタルコレクションより。

運動の文脈に位置づくことができる点を指摘させていただきます。

そして、その上で視点を京都の方へ移しますと、京都にありました京都府女子師範学校でも自らの研究成果を1933（昭和8）年に『郷土教育の概要』という著作の形で発表している、その目次を見ると、神奈川の事例と同じような資料を集めて郷土教育に取り組んでいたことが一目でわかります（図3）。その上でこの京都府女子師範学校の議論の中で資料がどう位置付けられているのか、若干注目したい点がございます。まず著作には郷土教育の目的が語られている部分がありますが、その箇所には「理想的郷土の建設への基礎陶冶」³という形で目的が述べられている。最初にこの点を理解しておきたいと思えますし、こうした「建設」や「開発」などの文言で郷土教育の目的が定められているというのは、当時一般的な傾向でございまして、この点については発表の最後で触れさせていただきたいと思えます。

それで2点目、資料との関係で指摘をさせていただきたいのは、先ほど紹介した箇所の後に登場する文言なのですが、「更に又かゝる郷土人にして始めて郷土文化を通して祖国の文化に貢献し国民的文化の発展に寄与し、進んでは国際的に世界的文化にも参加し得るであらう」⁴と論じられている。この文言、非常にですね、「文化」というものに焦点を当てて郷土を考えたり、郷土教育

³ 京都府女子師範学校郷土研究室『郷土教育の概要』同室、1933年、10頁。
⁴ 前書、10頁。

の実践を考えたりしている点が注目すべきところかなと考えています。と言いますのも、私はこの「文化」という概念をある種のスプリングボードにして、資料の議論が郷土教育論の中で深まりを見せているように感じるからでございます。

もう少しこの議論を具体的に紹介すると、京都府女子師範学校の考える郷土教育、その舞台となる郷土と言いますのは、「自然的精神的環境として郷土人の自我の発展に関与し自我の発展と共に一層深くその体験の中に融け込み情操としての愛を中心として此の体験を客観的に投射して眺めた文化的實在」⁵と捉えられています。非常に難しい話ですが、ここで押さえておきたいのは、この流れです。「文化」、さらには「体験」を重視する形で郷土や郷土教育を捉えようとしていることが、明瞭にわかります。この点、実は教育学の流れで言うと、「文化教育学」という大正の中頃・末期から影響をもった議論がありまして、こちらに影響を受けた議論がこの箇所、つまりこの文化教育学の影響で郷土教育における資料論が興味深い展開を見せておりますことを、今日のご報告しておきたいかなと考えております。ちなみに、教育史の分野で文化教育学と郷土教育の接続を試みた代表的な人物が、川崎市の田島小学校という公立小学校で校長をしていた山崎博先生でありまして、この人、郷土教育論など、様々な当時先進的と言える教育論を発表しています。とくにこの学校は東京大学の入澤宗寿という教育学者、文化教育学を批判的に受け入れ、日本においてどのように展開するかというのを考えた人物ですが、この学者が理論的なバックボーンとなって実践を追究していた場所なので、文化という視点から教育を考えることが非常に積極的に検討された学校なわけですね⁶。

話を資料に戻すと、この議論の中で資料がどう位置づけられていたのか、こんなことが述べられていたりします。郷土調査を行う際の注意点・メリットとして、「第三には郷土の文化を辿って、見た後では文化形象と関係づけて考へて見ることである。即ち具体的な文化生活の組織、文化財の個性全体に交渉づけて考へて見るのが大切である」⁷と論じられる。この箇所、「文化財」という概念が登場しています。文化財概念も非常に早い用例でありまして、その意味で注目されるものなのですが、ここから分かりますのは、資料の「個性」の側面にスポットライトが当てられ、その点に文化財等「文化」の観点から議論に深みが与えられている側面がある点です。さらにはこんな例もあります。「要するに郷土とは、児童が自然の生活乃至文化の生活に於て過去に属するものと、現在に属するものとに論なく、その全体的直接的なる生活で範囲の総和といふべきである。生活に直接のあることは地方化教育事実に於ける第一原理である。ことは前述したところである。即ち総合であり、生活であり、体験であるからである。これ文化財に接触し、内面的精神を体験せしめるからである。郷土文化財に出立することは要素より出立せずして、全体より出立し、生活することであり、体験し得る全体総和の結合である。(中略)かくて生活に直接的なる郷土文化財は、吾々に教育乃至指導の着眼と基礎と方法とをあたへる」⁸とも言われていた。ここで「郷土文化財」、つまり資料は、これを活用することである種「内面的精神」なるものを児童に体験し得る存在であり、だからこそ「郷土文化財」が児童・生徒の生活であったり、教育における生活であったりに、つながってける媒介となる。ゆえに「郷土文化財」としての資料というものを、郷土教育の基礎に据

⁵ 前書、5頁。

⁶ 文化教育学、及び山崎博と入澤宗寿の関係などについては、金子知恵「田島小学校における体験教育の理論と実践——文化教育学の移入とその限界——」『カリキュラム研究』、2004年3月、61-63頁を参照。

⁷ 山崎博『新時代の郷土教育』教育実務社、1931年、6-7頁。

⁸ 前書、156-157頁。

えて扱っていかねなければならないと主張されております。こういった「文化財」、つまり文化教育學など文化の思想に付随して語られていく内容との関係から、「内面的精神を体験し得る」といった議論が資料と関係づけられることによって、資料の位置づけが教育の実践においても、重要な地位にせり上がっていると思います。

このように郷土教育において「資料」というのは、実践の基礎の部分にもこうして浮上するものなので、府女専の旧蔵資料でもこのような部分から眺めてみると、どのようになるのであろうか。この部分を考えることは、非常に興味深いところだと感じるのですが、幾分抽象的で現状私のみでは考え尽くせないと感じておりますので、ぜひみなさんで様々な議論ができればと考えております。そして、この発表のもう一つの大トピック、京都における郷土教育について、続けて説明をさせていただけたらなと思っているのですが、私が籍を置く京都市学校歴史博物館には、郷土教育に直接関係したと一目でわかる教育標本は、実はあまり残っていないというのが現状なのです。図4のように、教科教育のための人形はしばしば残されているのですけれども、当館で所蔵している人形は、地域が行事のために学校に寄贈した雛人形や、東山地区の小学校に伝わっていた伏見人形など、これはまさに郷土教育関係と言えるかもしれないのですが、あまり多く伝わっていない。そういった標本から郷土教育の流れを辿っていくのは若干難しいかなと思いましたが、今日は学校歴史博物館にある文書資料を中心に、京都の郷土教育の流れを見ていきたいと思います。



図 4

結論から先に申し上げますと、私個人としては京都の郷土教育は、国家の主導する郷土教育の大きな流れに沿う形で展開されていた印象を現段階では持っています。基本的に郷土教育は、新しい行政区域が明治時代にできたものですから、その地域の新しいありようを認識してもらうという観点から、近代化の初期からずっと追究されています（図5）。1881（明治14）年にはもうすでに、地理において「学校近傍ノ地形」から始めますよと言われていたり、10年後の小学校教則大綱では先と同じ流れで、具体的に地理の条文に「郷土」という文字が出てきて、これからやりますよということがある種の基本のような形になっていました。京都でもこのような流れに乗っていくように、郷土地理誌は1876（明治9）年の段階で図5左下部に掲載したようなものが出ておりまして、ある種の出発点というのはこの時期に確認ができるわけです。

そして明治30年代、若干教育学の展開もありまして、郷土教育が少し変容します（図6）。例え

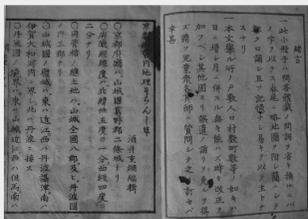
【2】京都における郷土教育の流れ②

・明治期の郷土教育

→新しい行政区域の確立等、新たな地域のありようを認識してもらう観点から、郷土教育は近代化の当初より実施されてきた

1881（明治14）年 小学校教則綱領…地理で「先学校近傍ノ地形」から始める

1891（明治24）年 小学校教則大綱…綱領と同じ流れ、地理に「郷土」の文字が入る、歴史や地理も重視（例、郷土の史談から始める）



山城地理要略
（三吉文編、山田安貞、1883年）



京都府管内地理そらんじ草
（酒井重綱編、藤井佐兵衛、1876年）

図 5

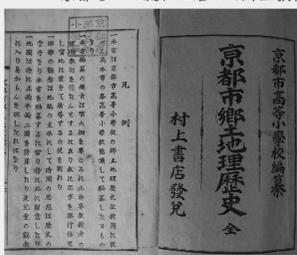
【2】京都における郷土教育の流れ③

・明治30年代の郷土教育の流れ

→ヘルバルト主義の定着によって、直観主義の内容を統合的にまとめる議論が深まりを見せる（例、棚橋源太郎（高等師範学校附属小）による「郷土科」）

→郷土唱歌の流行

→京都もこの流れに沿って郷土教育実践を検討、実施していく



作曲 楠美恩三郎
作歌 岩内誠一
村上勤兵衛発行
1901（明治34）年



1900（明治33）年公刊

図 6

ば博物館の議論でも有名な棚橋源太郎が「郷土科」という科をつくらうとしたように、ヘルバルト主義という教育学がいくつかの要素を統合して系統的な教育方法論を提唱するプロセスで、地理・理科・歴史と分化していた科目を1つに統合して、低学年により適切な教え方ができないかなということ、地理・理科・歴史すべてに一応対応できる「郷土」に注目が集まり、郷土教育が主張される動きがありました。また「郷土唱歌」も流行して、京都でも当然図6で紹介しましたように、様々な刊行物や成果が発表されていきます。図6の右側の唱歌、これは楠美恩三郎という京都府師範学校で唱歌を様々な形態で作成し、幼児の歌などもつくった人と、岩内誠一という京都市の生祥尋常小学校などで新教育を推進した人物の一人として名を残している先生が完成させたものです。

さらに京都市歴史博物館に図7で紹介した小学校校長会の資料も残っているものですから、こうした資料からも京都の郷土教育の流れを紹介できます。1903（明治36）年度、京都市の小学校校長会は、「尋常科第一学年ヨリ郷土誌ヲ教授スルノ可否」という郷土科に関する議論をしております。また、図7では紹介をできていないのですが、この議論の中では、全国でまだ実施できるところがないので、京都市が先駆けて行おうなんていうことも議論されていまして⁹、全国的な

⁹ 「京都市小学校長会記録 第一集 明治三十六年四月二十三日開会」市議事堂、19頁、京都市学校歴史博物館蔵

流れに沿いながら、自分たちもやるぞという意識があったことがわかるかなと思います。

大正期以降も、郷土教育は後に見る郷土教育運動ほどではないのですが、底流としてずっと議論は続けられていきます(図8)。ドイツにおいて第一次世界大戦からの復興のため「郷土科」ができて、日本も戦後恐慌に襲われて、そこからある種復興しなければならないというような時勢が、大正の末から昭和はじめにかけてあった時には、ドイツの郷土科を模範にして、これを追求していく流れもありました。また明治末から始まった地方改良運動では、全国で「地方」に注目が集まり、国民統合のある種のツールとして、郷土に注目が集まっていく流れもごぞいます。そして地方行政も変容していく中で、例えば1923(大正12)年の郡制廃止のような大きな出来事があると、それに伴って郡誌編纂ブームが起こって、同じように市町村誌が編纂、そしてその市町村誌編纂が郷土教育に繋がるという流れが、京都市でも確認できます。先ほどの川勝さんのご報告で、「比企忠」に言及がなされていたのは驚いたのですが、京都市でも錚々たるメンバー、例えば湯川秀樹博士のお父さんである小川啄治であるとか、現代でも注目されるモダン建築を多数設計した武田伍一などによって、郷土科の講習会が開かれたりもしていて、京都も力を入れて郷土教育を実践していたことがわかります。

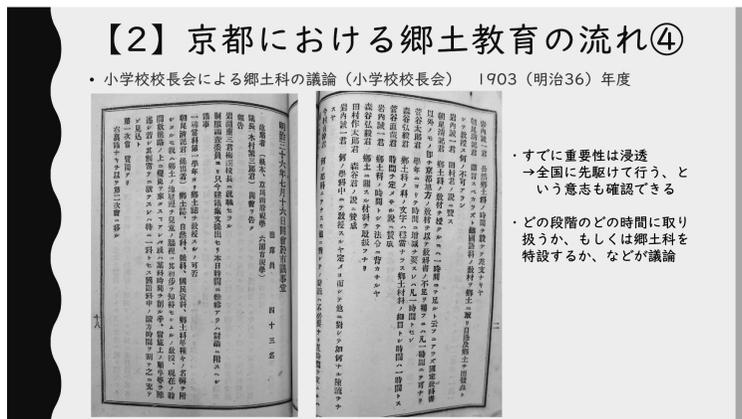


図7

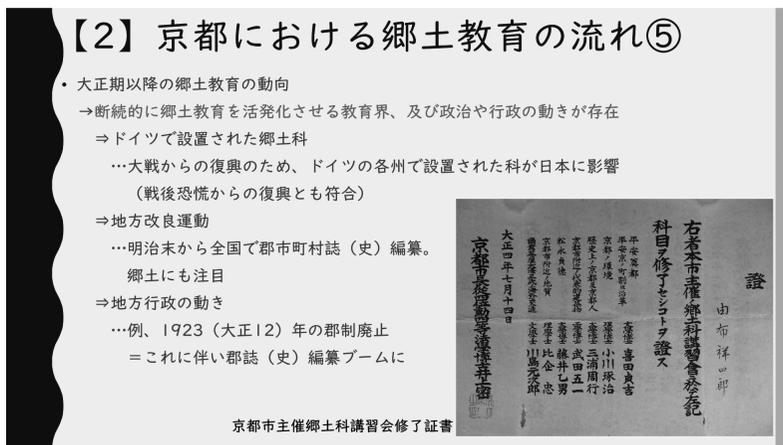


図8

ここで若干話が逸れるのですが、眞下飛泉（瀧吉）という京都市の新教育を主導した一人が面白い郷土教育実践を1913（大正2）年の段階でやっていたことも紹介したいと思います（図9）。眞下は卒業生の将来を見据えた、いわば学校と社会の接続を意識した郷土教育を意識的に実践していて、これはある種、大きい動きだけでは捉えきれない注目すべき実践もあったということで、少し紹介させていただきました。そして、あといくつか指摘をさせていただきたいことがあるのですが、京都において郷土教育が特殊であったところという、京都が大札の舞台になった関係で、その都度郷土教育に関する副教材が図10に紹介したような形で作成・展開されていく、いわばそうした資料が小学校に数多く残っていて、京都の場合はこういったイベントとの兼ね合いで郷土教育が盛り上がるところが、特殊な所かなと考えています¹⁰。それでも郷土教育運動の動きは、京都でも全国と同じような形で展開していて、図11で紹介したように、1930（昭和5）年前後か

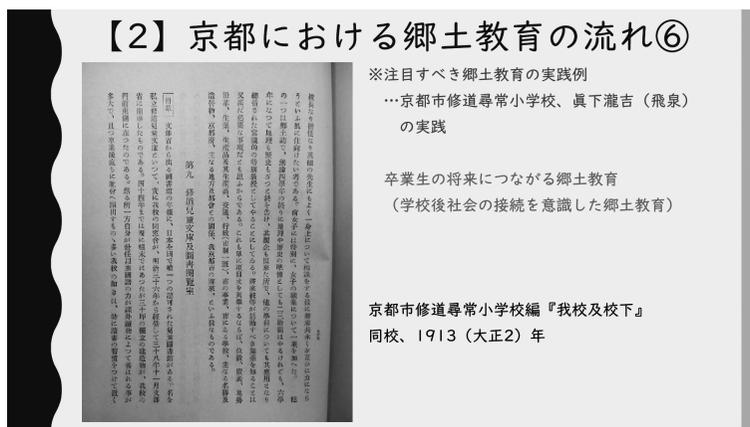


図9

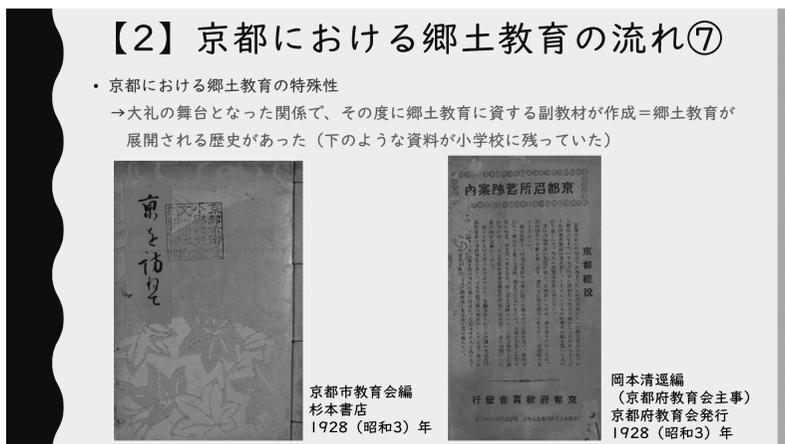


図10

¹⁰ 大札で郷土教育に盛り上がりが見られるのは、京都以外の地域でも確認されると想定されるが、京都の場合、「大札に訪れる人を迎えるための知識・態度」の養成という課題に取り組みなければならなかった。この点から生まれる各種の教育実践の存在は、京都の特殊性として指摘しなければならないだろう。

ら京都市小学校の教員会が『我等の郷土』という大著を編集したりして、郷土教育の実践に積極的に取り組んでいる。図11の左側の資料には、「スプランガー」という記述が登場するのですが、この人は文化哲学の観点から教育学の検討も行った、いわば文化教育学に関する重要人物です。この資料からは、京都の先生たちがこの人の議論を良く学んでいたことがうかがえて、この文化教育学や文化財など文化の思想の観点と京都のつながりがここにもあったのかな、などということを示想像してみたりします。このつながりの問題については、今後の課題としたいと考えています。

また、先ほど1930（昭和5）年と1931（昭和6）年の郷土教育の加予算の話がありましたが、京都市の小学校の校長会は1932（昭和7）年に、郷土教育運動に呼応するように図12に挙げたような調査を実施しています。ちなみに戦前期の京都市内の小学校ではどのような形で郷土室があったのか、この機会に簡単にではありますが、京都市内の小学校の記念誌を一度概観してみたのですが¹¹、確認できたのは現時点で翔鸞校・西陣校・初音校の3校とそれほど多い訳ではなく、多く

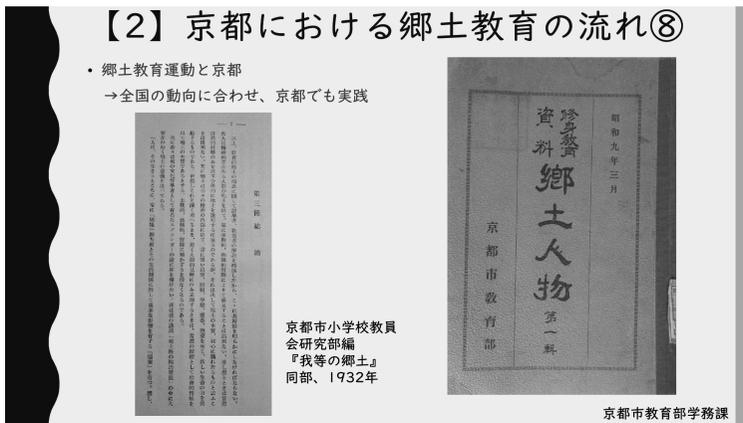


図11

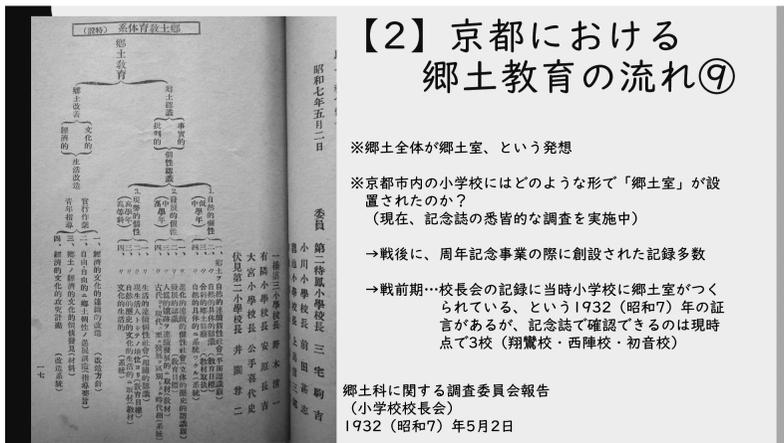


図12

¹¹ 主に年表部分の記述を中心として、学校歴史博物館所蔵の京都市立小学校の記念誌の悉皆的な調査を行った。ただ館に未所蔵の冊子もあるなど、調査はあくまで中途である。

は戦後に周年記念行事などで企画されて、創設されたという記録が多かった印象をもちます。なので、調査は中途なのですが、郷土教育が実際にどのくらい広がったのかという問題については、少し冷静に考えないといけないかなという気が若干しています。ただ実はこの校長会の記録の中には、近年その小学校の中に郷土室を設けるところがあるという証言も見出すことができますので¹²、記念誌に記録されていないだけで、実態として郷土室が小学校で拡大していた動きがあったかもしれない。こういった問題についても、今後の課題としたいと思います。

そして京都はですね、大まかに言ってしまうと南の都市部と北部の農山漁村部分から成る、いわば都市と農村が共存するという地域の特徴をもっていて、これを言い換えると郷土教育にも農村型と都市型の縮図があらわれる。本日のお話の前半で「開発」などのことにも触れましたが、そうした農村開発のための郷土教育と、もう一方で都市における郷土教育が追究され、府女専の実践もこの全体像のなかに位置づけなければいけないことを、指摘しておきたいと思います。京都の郷土教育が京都の教育史に関する先行研究で触れられる際、しばしば取り上げられるのが、公手喜代史という先生が福知山庵我校で主導した実践です¹³。それは貧困に苦しむ農村を再開発するための郷土教育、図13で紹介した今西校長の発表した実践もそうで、こうした性格がこれらの例には見て取れます。こうした全体図、いわば郷土教育の両面というものがあったことは指摘しておきたいと思います。

【2】 京都における郷土教育の流れ⑩

- 京都の郷土教育の一面…農村開発のための郷土教育
→京都は都市と農村部が共存するため、郷土教育の全体像（都市型、及び農村型）が縮図として現れる（この流れの上に、京都府立女子専門学校の実践があった）

一、概況
山崎本下町部が去る四二年、結部町の西側に移す。
二、移住
三、概況
四、概況

一、概況
二、移住
三、概況
四、概況

京都の郷土教育実践としてよく注目されるのが、公手喜代史が福知山の庵我校で行った実践

今西誠一（船井郡明俊尋常高等小学校長）
「我校郷土教育の実践」
京都府編『初等教育研究』同府、1932年、所収

図13

これを踏まえて、本日の総括に入りたいと思うのですが、まず府女専の旧蔵資料、とくに有職人形などは、京都の場合は「古都」ということで朝廷との関係が郷土教育の内容として必ず出てくる訳でして、その内容を知る上で有職人形は、京都の場合絶好の郷土資料、つまり絶好の材料を提供する位置づけにあります。その意味で京都で郷土教育を追究する、大礼などで郷土教育が盛り上がった時には、非常に重要な資料として働き得る可能性を、有職人形がもっていたことは一方で押

¹² 「京都市小学校長会記録 第四集 第九十九回定期公聴会」、15頁、京都市学校歴史博物館蔵

¹³ 井上裕雄・西元宗助「京都府」（小原国芳編『日本新教育百年史第6巻 近畿』（玉川大学出版部、1969年）所収）、198-202頁

さえておきたい。ただ、展示図録の中でしばしば先生方が「ちぐはぐさ」という点を指摘されていたのですけれども、郷土教育の観点から見る時にも、これらの資料群と児童・生徒の間にある「ちぐはぐさ」、そういったものを私も若干感じる訳です。先ほど申しましたように京都の場合には有職人形も郷土の対象に入ってきますし、先行研究でも指摘されていますように、このことを学んだ卒業生が府女専から教職に巣立っていく訳なのですけれども、ここでいう朝廷を含む「郷土」、つまり教え込もうと再生産された「郷土」というのは、「一体当時誰にとっての郷土だったのか」を考えてみると、紹介した「ちぐはぐさ」が浮かび上がってくるように思うのです。郷土教育に関する先行研究では、郷土と呼べる範囲自体が明治以来の行政区画の変化に伴って変容、つまり郷土意識も変化してしまっていることが指摘されている¹⁴。それでは京都の場合、朝廷のこうした意識を感じられる人たちは、当時どのように存在していたのか。そして、そこから接続される日本精神の議論などを、身近な郷土的事項と体感できる地域は、当時京都の中に一体あったのだろうか。これを体感できる児童・生徒がいた場合には、郷土教育として十分に認識できると思うのですが、それは一体どこだったのだろうか。事実としてそういった人や場所が存在したという可能性も十分あるとは思いますが。このポイントは考えてみなければいけないと思うのですけれども、このような教育の視点から見えてくる「ちぐはぐさ」もあって、朝廷文化のことを考え、女子大学の未来に向けた取り組みに朝廷文化をなにかしかの形で生かしていく際には、様々な側面から見えてくる「ちぐはぐさ」を正視して思考することが、実りある建設的な未来につながっていくのかなと感じた次第です。こういった議論を私も初めてお話したのですが、このお話がこの後のディカッションに何がかか寄与できればと願いつつ、発表を終了させていただきたいと思えます。ご清聴ありがとうございました。

横川

林先生、ありがとうございました。私どもが有職人形や郷土人形という教育標本として受け継がれたモノを通して、背景になることやモノが、実は非常に多くあるんじゃないかという予想はしておりました。今日の林先生のお話で、その視野にあるもの、広がり、到達したであろう視野のようなものに、こう非常に深く広い視野があるということを伺いまして、これは大変だと思ったところなんです。ご示唆いただいた、そういうことも今回の展示やオンラインフォーラムのきっかけになったのかなと思えました。そういうふうにつながっていただけたのは大変嬉しいことと思えます。

有職人形と郷土資料との関係ということを考えますと、一種のちぐはぐさのようなところがありまして、両者が両極にあるように感じられます。もちろん当時の、戦時下の特徴といえますか、その中で同じような方向をみることができるといことまでは気が付いたんですけども。むしろ京都では有職人形は郷土資料なんだということをおっしゃったのが、非常に新しい発見といえますか、印象に残りました。それから、京都自身にも変化があったという指摘とかですね、色々な重要なお話をいただきまして、考えることがいっぱい提案されたという、それだけでも今回のオンラインフォーラムは成功だったと思うくらいの内容だったと思えます。ありがとうございました。

このあと15時10分からパネルディスカッションに入りますので、それまでにご質問やご意見がございましたらチャットでお書きいただいでですね、その時に改めて討論に生かせたらと思えますので、一度ここで休憩に入らせていただきたいと思えます。

¹⁴ 小国喜弘「1930年代郷土教育運動における歴史の再構築」『東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室』第38号、2012年6月、4-7頁。

講師の先生方それぞれ、非常に充実したお話で、頭の方も少し疲れてきているかもしれませんので、ここでちょっとお休みをいただきまして、15時12、13分まで休みをいただきまして、次の準備をさせていただきたいと思います。それではよろしく願いいたします。

パネルディスカッション

横川

パネルディスカッションに入らせていただきます。本日、パネリストの先生方については、先ほどスライド画面にありましたように、当初、本学の株本准教授と伊永助教の参加を考えておりました。しかし株本准教授はやむを得ない都合によって、急遽欠席になりましたので、よろしく願います。また伊永助教は、今回の展示で主に有職人形を担当しました。有職人形自体についての説明と、背後にある時代とか教育の在り方について提案していただきたいと思います。チャットの質問も2件届いていますが、質疑に入る前に、伊永助教からの説明をお願いします。

伊永

はい、ご紹介に預かりました武庫川女子大学附属総合ミュージアムの伊永陽子と申します。本日は先生方大変貴重なご講演ありがとうございます。大変勉強になりました。またご質問させていただきたいと思いますが、まず、今回のミュージアムで行っております、秋季展「王朝文化へのまなざし」展の中で、私は主に有職人形の調査に携わらせていただいたのですが、そちらについてご紹介させていただきたいと思います。京都府立女子専門学校旧蔵の有職人形7体が武庫川女子大学に収蔵されていまして、それぞれの人形には桐箱がついておりまして、その箱に貼られたラベルから島津製作所標本部の製品、「中古装束人形」ということが判明しております。そして、箱の側面には「府立女子専門学校」という焼印がそれぞれついておりまして、京都府女専が開校した昭和2年、1927年を遡らない購入だと思われまます。製作年などはわかっておりません。この有職人形ですが、あまり一般的に知られていないかと思いますが、その現存するものを確かめていきますと、どうも旧制女子高等教育機関に残されているのではないかということがわかってきまして、女子高等教育機関の教育標本だったのではないかというふうに考えております。京都府女専旧蔵の有職人形は、台座付きの高さ約50cmの立ち姿の歴史的な服飾をまとった人形の通称といえるかと思いますが、島津製作所創業記念資料館さんからお借りした『地理及歴史学用標本目録』（大正3年出版）に掲載されていた「発売趣旨」という文章の情報が非常に大きかったと思っています。そこには7種の「中古装束人形」の写真が掲載されておりまして、展示中の人形はその7種類に全て当てはまっております。今展示室では、この『目録』のパネルと実際の有職人形資料を同じ順番に並べて、ご覧いただけるように展示しています。このことから有職人形は歴史のための標本であったということが初めてわかったわけですが、その文章によりますと、国史学や国文学において日本古代文明を理解することで国民的精神を広める、という役割が学校教育において期待されたということが明確に書かれています。また製作の動機には、直接的な経験や観察によって知識を得る実物教授を求める教育観が窺われます。その他に、明治以降西洋文物の流入によって旧物が軽んじられる風潮を懸念するような姿勢も読み取れます。また一方で、奈良女子大学の方にも同じく島津製作所標本部製の有職人形がありまして、そちらは先行研究があるんですけども、地理歴史部や国語漢文部の学生に対して行われた有職故実の授業で有職人形が用いられていた可能性があるという記録による検証が行われており、指摘がございます。有職人形がどのように使われたのかということが、初めはよくわからなかったのですが、今回少しずつ解明されてきまして、また皆様のお話の中でも有職人形を取り上げていただいて、さらに情報が盛りだくさんとなり非常に有難い気持ちがあり、とてご講演を面白く聞かせていただきました。私の方からこのような感じですが、横川先生、先に

チャットの方にいけますか。

(中略)

横川

はい、福岡女子大学の井出様よりチャットをいただいています。『本日のご講演大変興味深く拝聴しております。京都府立女子専門学校の講義科目に郷土教育に準ずる科目はあったのでしょうか。福岡女専の場合は郷土教育に繋がるような資料やそれを示す資料は残されておらず、今回のお話で初めて郷土教育と女子教育の繋がりを考えました。また有職人形は女子教育特有のものであるとご指摘がありますが、その他の地歴人形などは例えば、旧制中学などで使われていた事例などはあるのでしょうか。今回のフォーラムのお話から少しはみ出る質問ですが、もしご存知であればご教授ください。よろしく願い申し上げます。』ということです。では、どなたかお答えがお願いできますでしょうか。森先生、いかがですか。

森

はい、すみません。あの科目ははっきりとはわかっていないんですけども、ちょっと画面共有させていただいて、えっと、聞こえてますでしょうか。今画面の共有で京都府立女子専門学校の、こちらですね、出させていただいてるんですけども、これが完全かどうかわからなくて、百年誌に出ているものだけなんで、これが絶対合ってるというわけではないんですが、この科目名を見る限りはあの、郷土教育と直接繋がるのはないんです。ですので、修身とか教育でしょうかね、どの学科にも最初に修身と教育がありますので、もし使われたとしたら、これかなと思う…使われたというか、郷土教育が行われたとすれば、こちらかなと思うんですが。ただ郷土教育資料につきましては、収集の仕方というのは夏休みに実家へ戻った時に、そこの物を買ってくるという方法で収集したということなので、その何か有職人形のように教育標本として購入したとかそういうものではないので、授業内でどの程度使われたかっていうのはわかりません。先ほど紹介した学生さんの論文の中でアンケートも試みたんですが、卒業生の方に。でも授業で使った記憶はないみたいで、課外活動として行ったという結果でした。それももう何十年も経った記憶ですので、はっきりわかりません。郷土教育が授業の中でどの程度使われたのかってことは全くわからないんですが、あの展示された資料がどの程度授業で使われたかという、それほどは使われなかったのかなというふうに考えております。以上です。失礼いたしました。

林

あ、じゃあ私もいいですかね。後半の「フォーラムから少しはみ出るかもしれない」とご懸念されていた質問なのですが、これにつきましては、実は京都府立鴨沂高等学校さんと、京都文化博物館の学芸員の方が、現在鴨沂高校所蔵資料を調査されています。鴨沂高校は戦後の一時期、当時の京都府立京都第一中学校、現在の京都府立洛北高校が間借りしていた時期があって、その時期の影響で鴨沂高校に府立一中の資料が混じっている状況があるらしいのですけれども、そうした中に府立一中の地歴に関する標本もあり、府立一中には地歴教室もありましたので、おそらく使われた事例はあるだろうなと推察できます。

横川

有難うございます。それに関連してご発言がございましたでしょうか。…さきほど、言いかけた

のですけれど、奈良女子高等師範学校の同窓会・佐保会が郷土人形を集めていました。佐保会館という同窓会館を建てた時に、佐保会の呼びかけで、卒業生からそこに飾るために郷土人形を集めたというようなことです。佐保会の会員には京都府女専の教員になっていた人たちもいるということで関連があるかもしれません。京都府女専では教員養成をしておりましたので、教育現場でそういう、先ほど林さんをご指摘いただいたような必然性があったのだということと関係しているんじゃないかと思います。この点は、これからの課題ですけれど、そんなところですよ。

もう一つ質問が届いてまして、加茂さんという、本学の総合ミュージアムの学芸員ですが、読ませていただきます。「貴重なお話をありがとうございます。大変勉強になりました。今日のフォーラムでは教育に関する実物資料（標本資料）を多く提示していただきましたが、こうした資料と教科書は対応する事例があるのでしょうか。また標本資料に期待された教育効果などに関して、なにか当時の言説や証言は残っているのでしょうか。」というご質問です。いかがでしょうか。これは林先生にご回答いただけるのではないかと思うんですけど

林

そうですね。「国定教科書に登場するから実物資料を持ってきた」という事例は絶対にあると考えられますので、国定教科書の内容と実物資料の間に対応関係はあったらどうかと考えられます。また教育標本に期待された教育効果などに関しては、具体的にまだ体系的に調査ができた訳ではないのですけれども、私が勝手に考えているのは、いわゆる郷土博物館等の設立に動いていた棚橋源太郎の議論であるとか、あと郷土教育連盟がこの時期に雑誌を出し始めていて、この郷土教育連盟の言説と文部省が官報で発表する教育論が、郷土教育運動における郷土教育論の二大生産地点だと考えるならば、連盟の方の言説の中にそういった教育方法に関する期待であるとか、文化財に関する期待のようなものがあるのではないかなということですよ。私の発表の中でもお話をさせていただきましたが、第一次世界大戦の前後にドイツの哲学が入ってきて、文化の議論からそれぞれの資料への個性みたいなものに視線が集まるようになっていたので、こうした議論が生産されていた可能性は高いだろうなというように考えています。ただ、そうした形で目星をつけているぐらいなのが現状で、確定的なことは何も申し上げられず、紹介できたのは私が今把握しているような代表的な議論かなと言うところですよ。すみません、確信的なことが言えません。

横川

ありがとうございます。おそらく、林先生のご提案全体からも教育と郷土資料は密着していたんじゃないかという気はしますね。それについてはこれから、詰めていかれると思うのですけれども。郷土人形の意味ですが、一方では非常に趣味的な人形の会とかおもちゃの会というのが明治時代にもありましたけれど、大正時代をピークにしてありました。郷土人形に関する出版物もありますし、そういった趣味の会や、好事家たちの勢いがあったときでもあるんですね。それが教育の現場で、林さんがおっしゃったような文科省の方針ということが根本にあるのですけれども、組み込まれていた郷土資料、郷土人形自体の広がりや注目の注目は注目の注目です。さらにもう一方の有職人形との両義性みたいなものをひきうけていたことも見えてきていると思います。

今、福岡女子大の井出様から「よくわかりました。ご教授いただきましてありがとうございます。」というチャットが入っておりますので、お伝えいたします。

川勝

先ほどのお話ですが、提供側の島津の目録には、法令や教科書に準じる記載が多く、島津はその内容に順守して目録を作成していました。しかし、標本関係の目録にはそうした記載があまり見られないため、博物学の教育は、理化学教育と比較するとまだ曖昧な部分があったことがわかります。目録からは当時、教育で何が重視されていたかといった変遷も確認することができます。

横川

ありがとうございます。恐らく理科教育っていうのは、勸業政策とも直結していて、郷土教育にもそういった実用性が期待されるようなことがあったのではないかと思います。明治維新後の一貫した殖産興業に連なるような流れの中で、位置づけが可能な点があるんじゃないかという気がします。それに対して、林さんのおっしゃっていた文化教育というのは、郷土人形を文化として捉えて、教育の中で位置付けていくことだと思いますが、非常に興味深いことではないかと思います。恐らくそれが、最後には女子大学の将来にこういった王朝文化と郷土文化の両方への接近という、両義性といいますか、“ちぐはくさ”ということが、どのようにつながっていくのかという問題になると思います。実態としての郷土とは何かとか、郷土自身も変化しているのに、ますますわからないということも問題ですが。一方で有職人形が、京都だけじゃなくて実は東京にも名古屋にもあるってことが分かっているわけですから、有職人形にも位置づけが一律なのかどうか、違う所があるのかなという気もいたします。その辺をどのように把握していくかということが、もちろん女子高等教育の将来のことがあります。おそらく大学全体の将来に向かって、そのあたりをどのように捉えていくかということが非常に大きな課題ではないかなと感じます。というようことで、本当はもっと議論した方がいいのですが、ちょうど予定の時間になっていますので、最後に一言ずつ、こういった議論を踏まえて、相互にお話を伺った時点でなにか一言ずつ、まとめや感想をおっしゃっていただけますでしょうか。順番に森先生からお願いできます。

森

はい、すみません。もうお時間なので、ちょっと私からいくつか先生方にご質問したいことがあったんですけど、じゃあちょっと短く言うので、後でもしお答えいただける部分があればお答えいただければと思います。すみません。川勝先生に、大変貴重なお話ありがとうございました。とても参考になりました。それで、まず簡単な質問としては、聞き洩らしたかもしれないんですけど、各標本の納入先っていうのは、島津製作所の方で分かっているんじゃないんでしょうか、という質問と、それと次は感想なんですけれども、家事科のカatalogが、今回のテーマと少し離れるかもしれないんですけど、非常に興味深く思っています。それで理科と家事科はすごく密接なんです。それである京都府立桂女専もそうですし、私が今務めております日本女子大学もそうなんですけど、理科がやりたいんです。男性と同等にやりたいっていう考え方からすると理科がやりたいんです。女子専門学校なり、高等女学校は理科がやりたいんです。それで、理科の中等教員無試験検定も受けたいんです。けどなかなか通らないんです。文部省が理科の中等教員無試験検定を通してくれない。それで家事科になってしまうっていう歴史が先ほど紹介した学科の編成でも、最初理学科だったのが途中で家事科になってるんですね。日本女子大学でも同じようなことが起こっているんです。だから、理科がやりたいんですけれども、男性陣がですね、女子に理科なんかはできんということでやらせてくれない。で、家事科になってしまう。そういう歴史がずっとあって、日本の女子教育の中で、で、それで島津製作所で家事科のカatalogを作ってもらったのを見て、ああやっ

ぱりっていうか。日本女子大学なんかでも、理科の実験にすごく力を入れて、そういう写真もいっぱい残ってるんですけど、理科の中等教員無試験検定は受けられないんです。何回挑戦してもそこは合格しないで、家事科になっちゃうんですね。女子は家事と裁縫をやってなさいっていう。だから、すみません。ちょっと関係ないこと言ったかもしれないんですけど、なんかあのカタログを見せていただいて、いろいろ思うところがあってまた教えていただきたいなと思いました。以上が感想です。ありがとうございました。あ、それで林先生のお話も大変有難く、あの私の、というか学生さんが主にやったんですけど、過去の論文も読んでいただきまして、私は全然専門でもなんでもないのに、いろいろな論文や本を調べて郷土教育のことに挑戦して、たぶん間違いもたくさんあったと思うんですけども、林先生のご研究と繋がるような部分もあったのかなと思うと、大変嬉しく思いました。それで、先ほどのお話からわからないのが、有職人形が郷土教育とどういう関りがあったのかなってのがちょっとやっぱりわからなかった。私にはよくわからなかったということと、それと教えていただきたいのが、植民地との関連ですよ。あの今回の展覧会でもコーナーを作ってくださいまして、植民地に行っていた、住んでいた、住んでいて、桂女専に下宿して通っていた学生たちが家に帰った時に買って来たと思われる満州のものですとか台湾、植民地朝鮮のものであったわけなんですけれども、植民地とその郷土教育の関わりというのが、どうもちょっとわかりにくいようなところがあったので、もしなにかあれば、ご示唆があればお伺いしたいということと、すみません。最後に伊永先生に対してなのか、どなたに対してなのか、わかりませんが、有職人形が女子教育特有のものって言うのは言えるのでしょうか、というのがちょっとよくわからなくて。男子教育では使われなかったのか、あるいは残っていないだけなのか。京都府立大学でももう捨てられそうになってるんですね。共学の大学ではこういうものは置いとかななくてもいいということで捨てられかけているので。それで、残ってないだけかもしれないかなと思ったり、そのあたりお伺いしたいなと思いました。長くなって申し訳ございません。以上でございます。

横川

それでは、教育標本の理科教育との密接な関係ということでしたが、家事科のことに関していかがでしょうか。川勝さん。

川勝

最初のご質問である納入先についてなんですが、島津には経理資料がほとんど残っていません。そのため、経理的なことは納品先に残っている台帳などで明らかになることが多いです。昭和以降の産業機器など高額なものについてはパンフレットなどに記載されている場合もありますが、学校関係は全くわかりません。つぎに、「家事科目録」については、どうして家事に顕微鏡や剥製が必要で、標本や理化学器械の目録と重複した製品が多いのだらうと思ってたんですが、本日、女子も理科を学びたかったのに学べなかったことがわかり合点がきました。社会の在り方との関係から標本の奥深さについて気づくことができたので、今後も標本資料をしっかりと整理してまとめていきたいと思えます。ありがとうございました。

横川

なにか、伊永さんいかがですか。

伊永

森先生からのご質問、有職人形が女子教育特有と言えるのかということですが、現時点ではよくわかりません。ただ、有職人形もまだこれから新たに発掘される可能性もありますし、現時点で現存が確認されているものをみると、旧制の女子高等教育機関にだけなぜかあるということなので、そこからもしかして女子教育特有なのかなと思いました。その他に有職故実の授業を盛んにやっていたのは、歴史画を描くような美術の学校とかがあると思いますが、そういったところでは、装束は残っているそうなんです。それで、装束を実際に人物が着て、ポーズをとったりして、歴史画を描いたりしていたそうです。そのことを知って、美術学校にも有職人形はもともとあったけれど失くなってしまったのか、その部分はわかりませんが、現時点ではないことが確認されています。では、装束と人形との違いは何かと考えてみた時、もしかしたら人形は女子教育特有なのかもしれないと考えたのが原点にあったと思います。これからもっといろいろな事例が出てきて、どこに所蔵されているのかとか、どういう使い方をされていたのかということが少しずつわかってきましたら、面白い展開となるかなと思っています。ありがとうございます。

横川

はい、ありがとうございます。あの時間が急いておりますけれども、植民地と郷土教育との関係についてというご質問がありましたんですが、林さんいかがでしょうか。

林

ご質問をいただきました植民地と郷土教育の関係につきましては、私個人の研究も含めて今のところ全く手をつけられていない状況で、これは本当に今後の課題として考えていた問題になります。大変恐縮なのですが一言、京都及び郷土教育と有職人形のつながりという部分だけ若干お話をさせていただくと、これは学校歴史博物館でもよくお話しすることなのですが、京都で近代教育がスムーズに立ち上がっていった背景の一つに、近世以降の京都の町の人たちがもっていた教養、つまり公家と対峙してきた教養のような知が実は大きい影響を与えていたということがございます。朝廷の人たちを相手に商売をし、生活をしていくためには、その公家とやり取りができるだけの教養、町の人たちの知が必要であり、それが大きな役割を果たしたと指摘されるのですが、ある種生活の圏内に朝廷の人たちがいて、そのための知を必要としていた町の人たちにとっては、朝廷の文化は自分たちにとっての心理的な郷土のような形で感じていた側面があったのではないかと。私、森先生にご指摘を受けるまで、この議論を勝手に自分の中で当たり前のものとしてしまっていたので、誤って説明を省いてしまいましたけれども、こうした可能性があるのではないかと考えています。「そういった知の必要性を感じる人たちが昭和の初めになるとどのように京都に分布していたのか」というのが、非常に重要なところなのかなと考えている次第でございます。ご質問ありがとうございます。

横川

ありがとうございます。時間が足りなくて今からまだ色々なディスカッションが可能なように思いますけれども、結局、皆さんにおまとめいただいたような恰好で、終わらせていただくことにしたいと思います。どうも大変ありがとうございました。以上をもちましてオンラインフォーラムを一応終了させていただきます。ありがとうございます。参加者の皆様にもご協力いただきましてありがとうございました。最後に、お願いなんですけれど、チャットからアンケートページの

リンクへ移動していただいて、アンケートにお答えいただきますようお願いいたします。それでは失礼いたします。

付記

本研究は、JSPS科研費JP21K00154の助成を受けたものです。

また、原稿書き起こしをお手伝いくださった福富和沙さん（武庫川女子大学大学院 文学研究科 日本語日本文学専攻）にお礼申し上げます。